蒔絵和歌の浦図見台

この17世紀の漆塗りの見台は、蒔絵（金粉などの金属粉を柔らかい漆に塗る技法）で贅沢に装飾されている。金沢漆器の祖の一人であり、蒔絵の名手である清水九兵衛（?-1688）の作とされている。

清水は江戸（現在の東京）に生まれ、漆工芸を学んだ。17世紀初頭、加賀藩主・前田利常（1593-1658）に招かれ、加賀藩（現在の石川県と富山県）に移った。前田家の支援のもと、加賀では漆工芸の技術が栄えた。

よく見ると、画像の一部（鶴・芦・浜辺など）が浮き彫りになっており、質感のある立体的な効果を生み出していることがわかる。これは肉合研出蒔絵と呼ばれる技法で、研ぎ出しと高蒔絵を組み合わせたものである。このほかにも金銀切金（粉体ではなく、切削加工された金属を貼る手法）など、金沢漆器に関連する技法も用いられている。

この見台に描かれているのは、和歌山県の和歌の浦の風景である。8世紀の歌集『万葉集』に詠まれた短歌が題材になっている：

若の浦に
潮満ち来れば
潟をなみ
葦辺をさして
鶴鳴き渡る

和歌の浦に
潮が満ち
干潟が水に沈むとき
鶴が頭上で鳴き
葦が生い茂る岸辺に渡る

この見台は、1998年に重要文化財に指定された。